氏　　名	下地　敏洋
学位の種類	看護学博士
学位記の番号	甲　第1号
学位授与の日付	平成19年3月10日
学位論文題目	高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究 －宮古出身者の地域文化行動を通して－
論文審査委員	主査　沖縄県立看護大学教授　神里みどり 副査　沖縄県立看護大学教授　上田礼子 副査　沖縄県立看護大学教授　栗栖瑛子

学位論文の内容の要旨

1．緒言

我が国は、超高齢社会に向かい、高齢者ケアのあり方が社会的課題としてクローズアップされてきた。また、生活環境の変化や人生の背景、及び価値観の多様化に伴い、高齢者個々人の持つケアニーズも多様なものとなっている。

本研究において、地域文化行動を「特定の地域で共有されている言語や生活様式」と操作的に定義し、その構成要素は、①方言で会話すること、②地域に住むこと、③地域の伝統行事に参加すること、④地域行事に参加すること、とした。

本研究の独創性は、①情報化・グローバル化、物質的豊かさが進展する社会の中で、考え方、暮らし方、生き方に生涯をとおして影響を与え続ける地域文化行動に焦点を当てること、②老年期に生きる高齢者の体験から実証的に高齢者の地域文化行動が個々の幸福感に及ぼす影響要因を明らかにすることである。

以上のことから、本研究の目的を、高齢者の地域文化行動がその幸福感に及ぼす影響要因を明らかにすることとした。

2．研究方法

1）対象：地域文化行動に特徴がある沖縄県宮古島市に在住する高齢者（宮古対象者）100 人と宮古島出身で浦添市に在住する高齢者（浦添対象者）97 人であった。対象の条件は、①地域に住んでいること、②自立していること、③地域行事や伝統行事に参加していること、とした。

2）調査項目：基本属性と地域文化行動に関するものとし、質問は半構成的なものとした。基本属性は、①性、②年齢、③世帯構成、④配偶者の出身地、⑤教育歴などであった。地域文化行動に関する半構成の質問項目（12 項目）は、①友人と話す機会、②友人と方言を話す機会、③地域行事への参加、④伝統行事への参加、⑤生活で嬉しかったこと、⑥これまでの人生で苦労したこと、⑦宮古島以外の場所で生活したいか、⑧これからの生活で期待すること、⑨これからの生活で心配なこと、⑩人生をやり直すとしたらどんなところを変えるか、⑪人生で自慢できること、⑫宮古島の歴史や文化で誇りにできること、であった。また、浦添在住者には、質問項目⑦「宮古島以外の場所で生活したいか」を、「宮古島に戻りたいか」に変えて実施した。

3）調査方法：面接と聞き取り調査と留め置き調査で３回実施した。第１回は、基本属性と地域文化行動に関する半構成の質問項目による面接聞き取り調査、第２回は小田の幸福感尺度の質問紙を用いた留め置き調査であった。第３回は、高齢者の地域文化行動と幸福感（幸せ・健康）との関係を直接聞く半構成の質問項目による面接聞き取り調査である。

調査は、対象者が指定した場所で実施し、第１回と第２回の調査期間は宮古対象者が平成 18 年７月、浦添対象者が平成 18 年８月～9 月、第３回は平成 18 年９月～10 月であった。

4）分析方法：第１回調査は、質問項目の回答内容から、対象者が述べた地域文化行動を行う多様な理由を取り出し、調査の回答内容を原文のまま記述し、類似した内容を集め(小分類)、研究の目的である高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響要因を明らかにするという研究の趣旨に照らして分類(大分類)、命名し、幸福感の影響要因を推測した。第 2 回調査は、小田の幸福感尺度を点数化し、合計して総合得点化し、第１回調査の大分類との関係をみた。第３回目は、質問８項目のそれぞれについて、第１回目と同じ手順で分析し、語られた影響要因を導いた。

3．結果

1）高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼすと推測された共通する影響要因

①「友人と方言で話すこと」は《慣れた言葉で伝え合える》《宮古の言葉のよさを感じる》《コミュニケーションを楽しめる》《なじみを感じられる》であった。

②「宮古に住むこと」は、《愛着・生まり島》《住みやすい》《のどかで優しい》《子・子孫がいる》《友人・近隣とのソーシャルネットワークがあって楽しい》《一生ここで暮らしたい》《年なのでどうしようもない》《ゆれる心》、浦添在住者では、《生まれた島に帰りたい》《宮古が良い》《家族がいる》であった。

③「伝統行事に参加すること」は、《祈願》《交流》《義務》であった。

④「地域行事に参加すること」は、《楽しむ・和む》《役割がある》《健康》《義務》《皆が集まる》《情報や連絡がある時》であった。

2）地域文化行動が高齢者の幸福感に及ぼす語られた影響要因

①「友人と方言で話すこと」は、《慣れた言葉で伝え合える》、《宮古の言葉のよさを感じる》、《親しみを感じる》、《安心・気持ちがよい》であった。

②「宮古に住むこと」は、《愛着・生まり島》、《安心》、《友人・近隣のソーシャルネットワークがあって楽しい》、《子・孫がいる》、《住みやすい》であった。

③「伝統行事に参加すること」は、《祈願》、《健康を祈る》、《みんなで楽しい・嬉しい・皆と会って楽しむ》、《伝統行事への貢献・役割がある》であった。

④「地域行事に参加すること」は、《交流》《健康のため・健康につながっている》であった。

3）高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響要因

①「友人と方言で話すこと」は、《年寄り同士昔を話せる》、《慣れた言葉で伝え合える》、《コミュニケーションを楽しめる》、《宮古の言葉の良さを感じる》、《同郷の心であたためることができる》、《親しみを感じる》、《癒される》、《安心》、《笑う》、《元気が出る》、《健康の話ができる》、《地域文化をつくる》であった。

②「宮古に住むこと」は、《揺れる心》、《年なのでどうしようもない》、《愛着・生まり島》、《友人・近隣とのソーシャルネットワークがあって楽しい》、《子・孫がいる》、《気楽な対人交流が多い》、《安心》、《のどかで優しい》、《住みやすい》、《笑う》、《島でとれたものを食べる》、《運動》、《生活がある》、《することがある》、《住み遂げる》、《一生ここで暮らしたい》であった。

③「伝統行事に参加すること」は、《交流が楽しい》、《祈願》、《心の拠り所》、《心の健康》、《安心》、《健康を祈る》、《からだの健康》、《健康の確認》、《義務・役割》、《多様な人生を感じることができる》であった。

④「地域行事に参加すること」は、《交流》、《近くだから》、《爽快》、《健康につながる・幸福感につながる》、《笑う》、《元気のもと》、《楽しい・和む》、《義務・役割》、《人間を拡げる》であった。

4．考察

1）高齢者の 4 つの地域文化行動による幸福感への影響要因をまとめると、地域文化行動がもたらす交流という行為に関わり、コミュニケーションの活性化とともに、人的ネットワークのよさを感じ、安心して地域文化行動を楽しむという快い感情を得ている影響要因もある。いずれの地域文化行動にもそれ

ぞれ高齢者が担う役割があり、高齢者に参加への義務を感じさせ、役割を再方向づける影響要因を内包している。

2）老年期の自己実現・統合をめざす課題に、①老化に伴う身体的変化に対する対応、②新しい役割や活動へのエネルギーの再方向づけ、③自分の人生の受容、がある。地域文化行動から《安心》感が高まり、《役割を果たす》ことから、精神的な安らぎ・満足感・成就感を得ることが、人生の受容につながり、交流は統合という人生の最終段階にある発達課題達成の影響要因になっている。

3）高齢者の幸福感の向上を目的とする看護方法の開発には、高齢者の地域文化行動や生涯発達の視点を加えることが重要だと考える。地域文化行動を取り入れることは、従来の機能向上をめざすだけの看護方法ではなく、本研究の対象者たちによって語られた《笑う》、《爽快》、《元気のもと》、《役割がある》に繋がり、大規模な健康増進が図られると考える。具体的方法として、同じ地域文化を持つ者同士が交流する、療養室やユニット等の工夫が挙げられる。

4）超高齢社会における生涯教育では、地域文化を共に生きる力と交流する力を育むことが求められ、そのことを可能とする社会システムの構築が課題となる。本研究で、高齢者の地域文化行動と幸福感への影響要因はいずれも老年期の発達課題と関係づけることができた。その影響要因を幸福感に結びつけるには、支援もさることながら、老年期までに養って来た高齢者自身の能力も大きい。そこで、老年期の幸福感と発達課題の達成という視点から、培うべく基礎的能力は、〈楽しい〉や〈安心〉であるといえる。

5）本研究は地域文化行動を通して高齢者の人生の統合をどう支援するのか、超高齢社会に生きる子ども達のライフステージにおける生涯発達をどう支援するのかを問う、極めて実践的な研究である。

6）本研究の限界と今後の課題として、今回は宮古出身者を対象として、地域文化行動が高齢者の幸福感に与える影響要因を明らかにしたが、必ずしも宮古特有のものではないと考えられる。今後、他の地域で、多くの影響要因が見いだされる可能性も大である。どのようなものが見いだされ、どのように看護や教育のシステム、地域文化行動の要素を発展させることに役立つのか、その成果を見定める研究が必要である。

5．結論

1）本研究では、高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響要因を多数見いだすことができた。そのいずれも高齢者の発達課題である「老化に伴う身体的変化に対する対応」、「新しい役割や活動へのエネルギーの再方向づけ」、「自分の人生の受容」との関連が見いだされた。

2）高齢者の幸福感を支援する看護方法への活用や地域文化を生きる高齢者の発達課題も視野に入れたケアを検討することの重要性が示唆された。

3）超高齢社会を生き抜くために、生涯にわたる教育の中で地域文化を感じ、様々な人々と心を通わせ、ともに生きる能力を育成することの必要性が明確にされた。

論文審査の要旨

研究者は、1988年に米国の大学院の修士課程において、「高齢者の幸福感をいかに高めるか」という研究テーマに取り組み、実際に異文化の中で生活している日系一世の施設入所者のケアを通して、文化的背景を考慮したケアの重要性について明らかにした。本研究ではその研究を踏まえた上で、地域文化行動が実際に幸福感に影響している様相を宮古出身者に焦点をあて調査を実施したものである。これまで地域文化行動と幸福感との関連性について焦点をあてた研究は皆無であったため、本研究テーマに着眼した点において、老年看護学や高齢者ケアにとって独創性に富んだ研究論文である。

1．研究の特に優れた点

1）文献レビュー

国内外の高齢者の幸福感に関する先行研究、関連文献を幅広く検討し、地域文化行動と幸福感を関連づけた先行研究が皆無の状況の中で、地域特性や文化の概念定義の文献レビューを通して、地域文化行動の操作的定義を導き出してきたことは、老年看護領域における学術的発展性に貢献しているといえる。

2）研究課題の設定および方法の独自性

地域文化行動を4つの視点（方言、地域に住むこと、伝統行事、地域行事）からとらえ、それと高齢者の幸福感への多様な影響要因を見いだすために、2つの異なる地域の中で宮古出身者という多数の高齢者（197名）を対象にして面接調査を実施したことは研究目的を達成する上で妥当な方法だといえる。さらに、本研究者が宮古出身者であったがゆえに、調査協力が得られてきた経緯があり、調査者が複数に及んだ面接調査の一貫性という点では今後検討の余地はあるが、本論文の結論を導き出す上で貴重なデータ収集ができたといえる。

3）保健看護学への貢献度について

本研究の知見は、高齢者のみでなく超高齢社会に生きていく次世代の者に対する生涯発達支援も含めた看護活動、学校教育、超高齢社会のシステム構築に寄与できる実践的な応用可能性を秘めた研究である。

2．論文審査会において検討を要する主な点

1）宮古出身者に限定された高齢者であるため副題をつける必要がある。

2）方法論、特に対象者の選定方法やプレテストを通して、本調査を実施する研究方法のプロセスが明瞭に記述されていないのでこれらを明記する必要がある。

3）地域文化行動の4つの視点のうち、伝統行事や地域行事への参加の程度や頻度との関連は明確でないので考察や研究の限界で言及する。

4）量的データの検定に関して、データの分布状況に応じた適切な方法で検定を行う必要がある。

これらの指摘はいずれも論文の追加・修正により改善された。

（最終試験結果の要旨）

看護職以外の背景をもつ著者が看護学の博士課程コースを修了するためには、看護職の背景を持つ学生より、3科目以上の科目履修の義務があり、さらに看護専門用語を含めてかなり努力をして全科目の履修を行ってきた。その科目履修のプロセスで、幅広い知識を得たことが本研究を進めていく上で強い動機付けになった。この研究テーマを通して、老年保健看護に関する専門的知識とこの領域における新たな挑戦を要する課題をみつけ今後の教育研究に寄与できる能力、技法、態度を修得できた。

以上より、申請者は、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。